



我が附属、同窓会、 そして愛しの野球部

附属横浜中学校同窓会 初代会長 新井康友



今回お誘いを受け、友と過ごした附属小学校、中学校、そして同窓会のあれこれを記し残しておくこととしました。

一・附属小学校と疎開

私は純粹の附属人ではない。昭和十六年四月間門小学校一年生。十二月太平洋戦争勃発。三年を経て、昭和十九年四月附属小学校四年に編入学。その八月に中郡秦野町（現秦野市）に集団疎開。我々四年生は天徳寺本堂両脇の畳の部屋に男子組、女子組に分かれて集団生活を開始。

初めての親元を離れての生活ではあったがさみしくはなかった。しかし食糧不足は深刻で粉の胃薬「ソキン」を皆で飲んで空腹をまぎらわせた。又、勝手に畑のサツマ芋を掘ってきて（これって盗みかな）、教生（今の教育実習生）の先生に茹でてもらった事も。先生も「このお

芋どうしたの」とは聞かなかった。お寺でやった夜の墓地の肝試しウォークは怖かった。別々のルートを歩いた友と、お墓の角でぶつかった時は思わず「ギャー！」と悲鳴。辛かった集団疎開も今となつては懐かしい思い出。

昭和二十年春からは食事状況を心配した親の手配で隣の西秦野村の農家の一室に弟（当時附属小三年）と二人で縁故疎開。やさしいオジさんオバさんに木を切つて薪にするのを教えてもらつたり、草刈りの手伝いをしたり。丹沢のふもとでまさに山紫水明。学校帰りに地蜂の巣を見つけ、掘つて幼虫を捕まえ、「お前も喰えよ」で口に。気持ち悪いし、おいしくはなかった。でも短い間だった村での生活は本当に楽しかった。「夢は今もめぐりて、思い出さるふるさと」

やがて八月十五日、昭和天皇のラジオ放送は農家の縁側で近所の人達と一緒に聞いた。「そうか耐え難きも耐えなければいけないんだな」と納得。

十月ごろ横浜に戻り（我が家は焼けず無事だった）、十一月附属小へ五年生で復学。しかし男女二クラス約八十名のうち、学校へ戻ってきたのは僅かに三十名弱、家が焼けて横浜に戻れ

なかつたり、当時学校も校舎が不足して戻るのが少し遅れると「もう定員一杯で無理です」と断られた友も沢山いたと聞く。このあとの五、六年生の間は混乱期であまり学校生活の記憶がないが、六年生の時、中区の体育大会のような催しがあり、我が附小チーム（稲田、新井、西田、福田）は四〇〇米リレー決勝で四位になっている。

二・附属中学校

その後我々附属小三七期は昭和二十二年三月無事卒業。ところが新制中学として創立された神奈川師範学校女子部附属中学校の一年生になったのは同年五月、何だ？四月は？四月中は附属小学校高等科在学だったそうなる。

中学生（三十名）にはなつたものの先生は少なく、校舎も無く教科書がこれまた傑作。ザラ紙に刷られ折り畳まれた物を一人ずつ渡され、自分でナイフで切り離し頁を揃え隅に穴をあけヒモで結んで出来上がり。

教室は師範本校舎講堂舞台裏の狭い控室。両側に机を詰め込み間の通路は幅五センチくらい。一旦坐つてしまえば授業終了まで身動きが取れない状態。それでも天皇陛下が「忍び難きも忍べ」と言つたんだから仕方